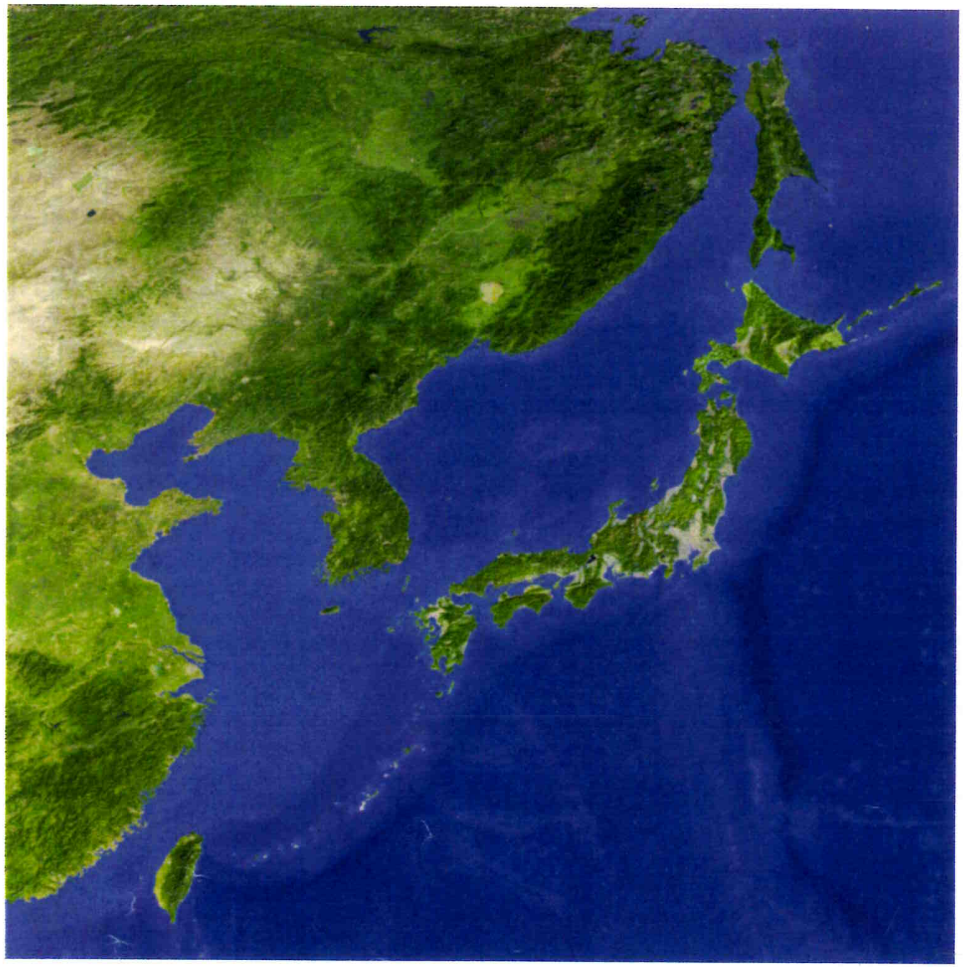
『新・やまと物語』（第１０巻）

タイトル

第６９章　第三期二朝時代〔天上国の推古天皇・日辺日本国の等与刀弥々大王〕
第７０章　推古朝の寺院・仏像
第７１章　阿蘇山
第７２章　隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わしむ
第７３章　国に二の君非ず
第７４章　皇太子厩戸豊聰耳皇子
第７５章　金人の夢告
第７６章　太子の苦悩
第７７章　聖徳太子の薨去
第７８章　蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御

新・やまと物語 (10)

古閑炯作（こがけいさく）



画像提供：東海大学情報技術センター

1

10巻

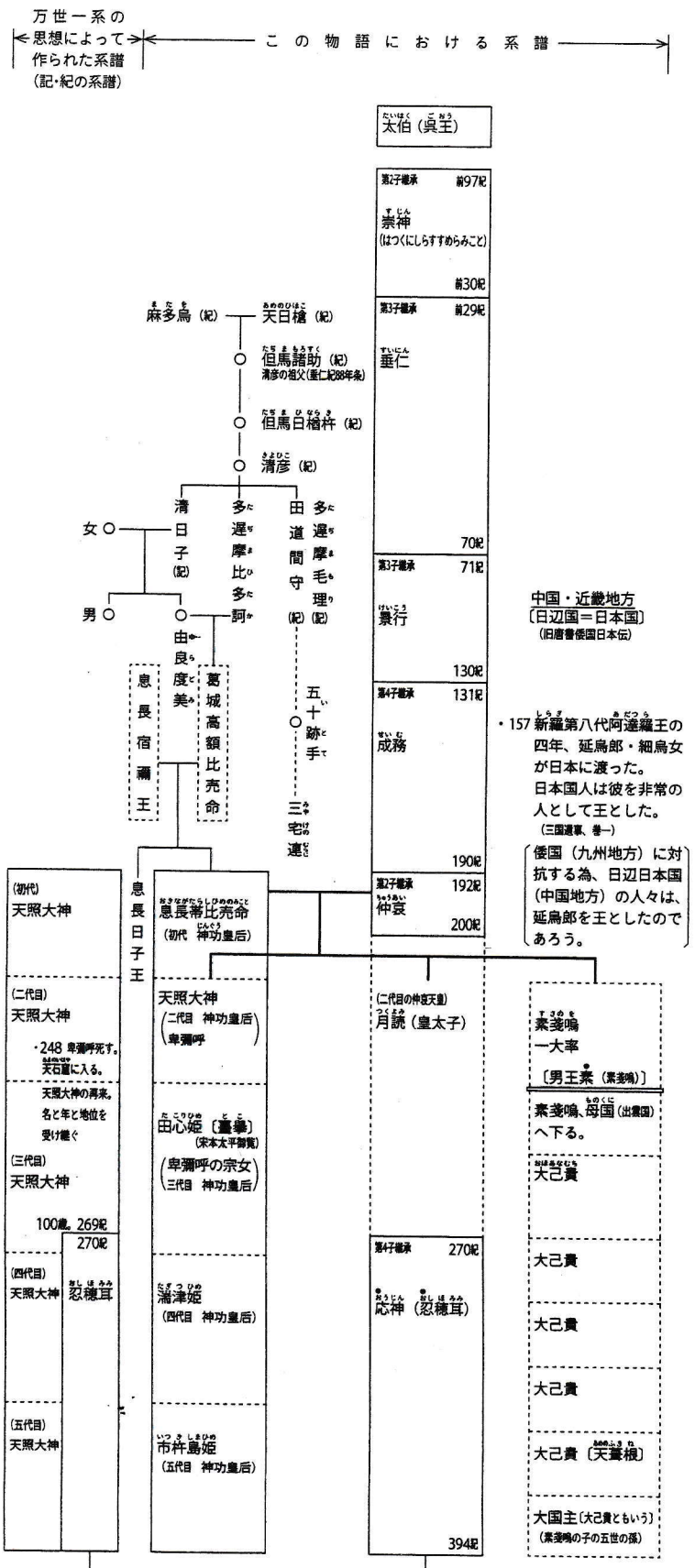
画像提供：東海大学情報技術センター

2

（拡大映像）

〔第１表〕系譜

A3に印刷



中国・近畿地方
〔日辺国＝日本国〕
（旧唐書倭国日本伝）

・157 新羅第八代阿達羅王の四年、延烏郎・細烏女が日本に渡った。
日本国人は彼を非常の人として王とした。（三国遺事、巻一）
〔倭国（九州地方）に対抗する為、日辺日本国（中国地方）の人々は、延烏郎を王としたのであろう。〕

瓊瓊杵命が磐長姫をしりぞけたので、これより以後、天皇命等の命が短くなった」（記）
つまり、長男（長女）が襲名している限り、同一名を名乗るという古来の風習は、瓊瓊杵命（仁徳天皇）の時に廃止され、これに替わって、大陸の王位継承法が採用されることになったのであろうか。
これより後、王位は、複雑に継承されてゆくことになる。

・殷末　周の太伯は、弟季歴に位を譲る為、江南にはしり、文身断髪して君長となり、呉国を建国した。
〔「倭人は自ら太伯の後と云う」と、魏略逸文・晋書・梁書に記されている。〕
・（？）　前漢の武帝（在位前141～前87年）、閩越王を滅ぼす。（史記・漢書）
＊閩越王は、実は、太伯の末裔だったのではなかろうか。
・（前104頃）　太伯の後、閩越奪還をあきらめ、会稽の東冶あたりから九州へ東遷開始か。
・前97　崇神天皇即位。箕子達の百余国（後代の倭国）中の極南界の地に倭奴国を建国して王となったか。
〔倭奴国は、後漢末（220）の版図でいえば、倭国（北九州・山口地方）の極南界に位置していたのであろう。（後漢書倭伝）〕

・（垂仁28）　垂仁天皇の同母弟「倭彦」が薨じた時、殉死が始まった。（崇神記・垂仁紀）
・　57　極南界の倭奴国が奉貢朝賀した。（後漢書倭伝）
・　61　田道間守を常世国（元の閩越のことであろうか）へ遣わす。
・　71　橘を持ち帰った田道間守、殉死する。（記・紀）
・　107　倭国王帥升は、生口百六十人を献じ、請見を願った。（後漢書倭伝）
・　147　桓・霊の間、倭国大乱。（後漢書倭伝）
〔倭国と箕子国との戦いであったろうか〕
倭国が箕子国を奪い取り、北九州・山口地方に三十余国を置いて統治することとなったように思われる。
・　188
＊北九州・山口地方の小銅鐸終焉。
・　200　神功皇后、朝鮮半島南端の狗邪韓国を領有。
・（？）　南の奴国のことを「邪馬台国」（八女土国）と呼称するようになったか。
・（？）　共立（男弟が卑彌呼をたすけて国を治めた）
・　239　倭の女王卑彌呼、難升米らを遣わし、魏帝に朝献。（魏志倭人伝）
・　247　倭の女王卑彌呼、狗奴国・男王卑彌弓呼素と不和。（魏志倭人伝）
・（248？）　卑彌呼死す。男王（素戔嗚）立つ。
国中服さず、当時、千余人を殺す。
・（？）　卑彌呼の宗女薑摩（田心姫か）年13を王となす。
・（？）　素戔嗚、出雲国（今の近畿地方）へ下る。
＊「宇宙に君臨たるべからず」と申し渡された素戔嗚は、中国山脈の山奥伝いに下っていったのだろう。（「紀」三貴子誕生条。他参照）
・　266　神功皇后、晋の武帝泰初二年に貢献。（紀）
・　313　晋の力が弱まった。高句麗は楽浪郡（平壌あたり）を併合。
・　314　高句麗は、引き続いて帯方郡を亡ぼす。
＊この頃、高句麗は、馬韓（百済）・辰韓（新羅）を属国としたのであろう。
＊この当時、馬韓から百済へ、辰韓から新羅へと国名が変わったようである。
・　331（辛卯）　倭は辛卯の年に来って海を渡り百残（百済）・□□・新羅を破って臣民とした。
（広開土王陵碑・神功皇后の三韓征討）
・（372？）　百済、七枝刀を倭国に献上。（干支2運繰り下げ）
＊七枝刀に泰和四年（369）の銘有り。
・（？）　天叢雲剣を献上。阿蘇の火を三輪山に移す。
・（？）　中つ国（東の狗奴国）を平定。銅鐸終焉。
・（？）　出雲国（近畿地方）の国譲り。
＊大国主、今の出雲に新しい出雲国をつくる。
・（？）　応神天皇、難波に大隈宮を造営。
・　391　広開土王即位。
・　396　広開土王、躬（みずから）水軍を率いて百済を討ち、多くの城を落す。（広開土王陵碑）
〔応神天皇の崩御の機をつかんで、高句麗は百済へ攻め入ったのであろうか。〕
・　400　高句麗が倭軍を任那加羅まで追撃。（広開土王陵碑）
・　404　倭軍は、帯方の地にまで侵入して高句麗と戦ったが、大敗。（広開土王陵碑）
・　407　京畿道北部で、再度大敗。（広開土王陵碑）

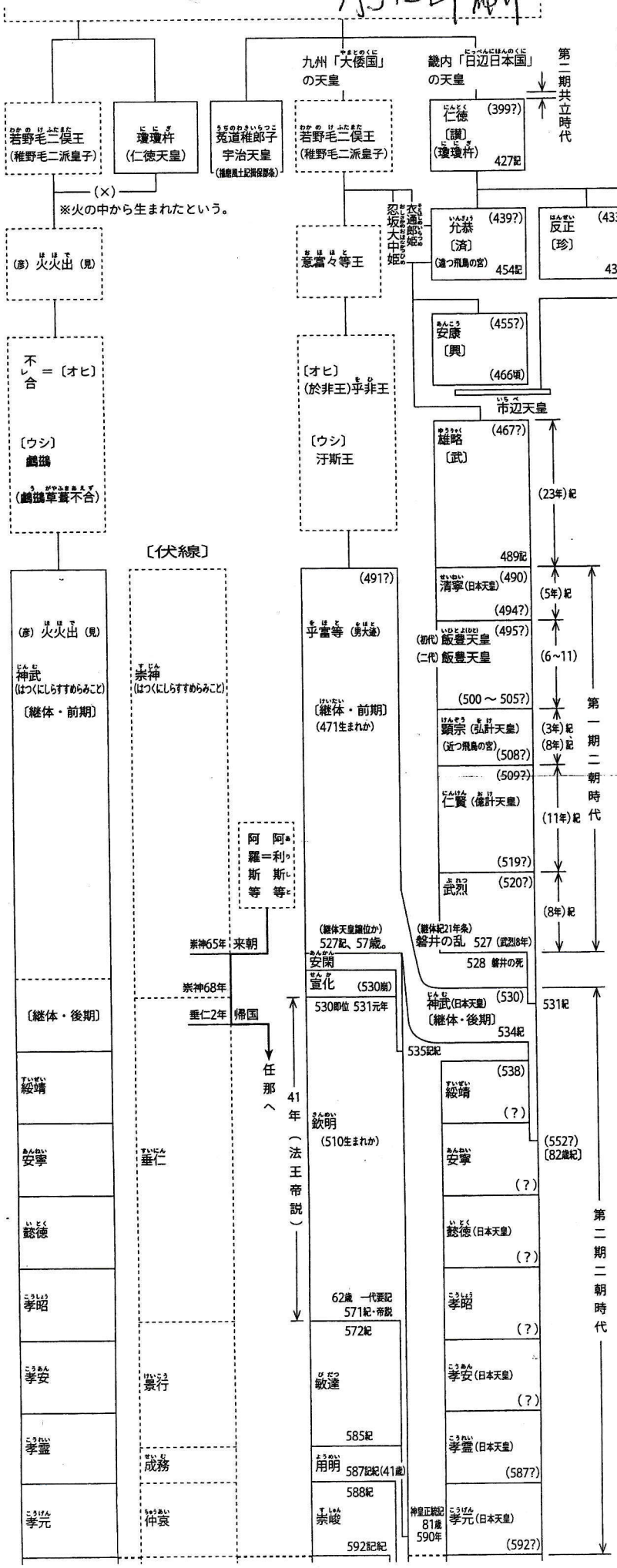
『新・やまと物語』第一巻第一表から転写して下さい。決して新しく作らないで下さい。チェックが大変だからです。

必ず、切断の為の線を入力して下さい。

4

234

A3に印刷



- 413 倭王、東晋に入朝。（晋書安帝紀）
- 420 東晋亡び、宋起こる。
- 421 倭王讃、宋に入朝。（宋書倭国伝）
  （仁徳天皇・オホサザキの「サザ」をとって讃の字を当てたといわれている）
- 425 同上
- 430 倭国王、宋に入朝。（宋書倭国伝）
  （履中天皇・イサホワケの「サ」をとって讃の字を当てたといわれている）

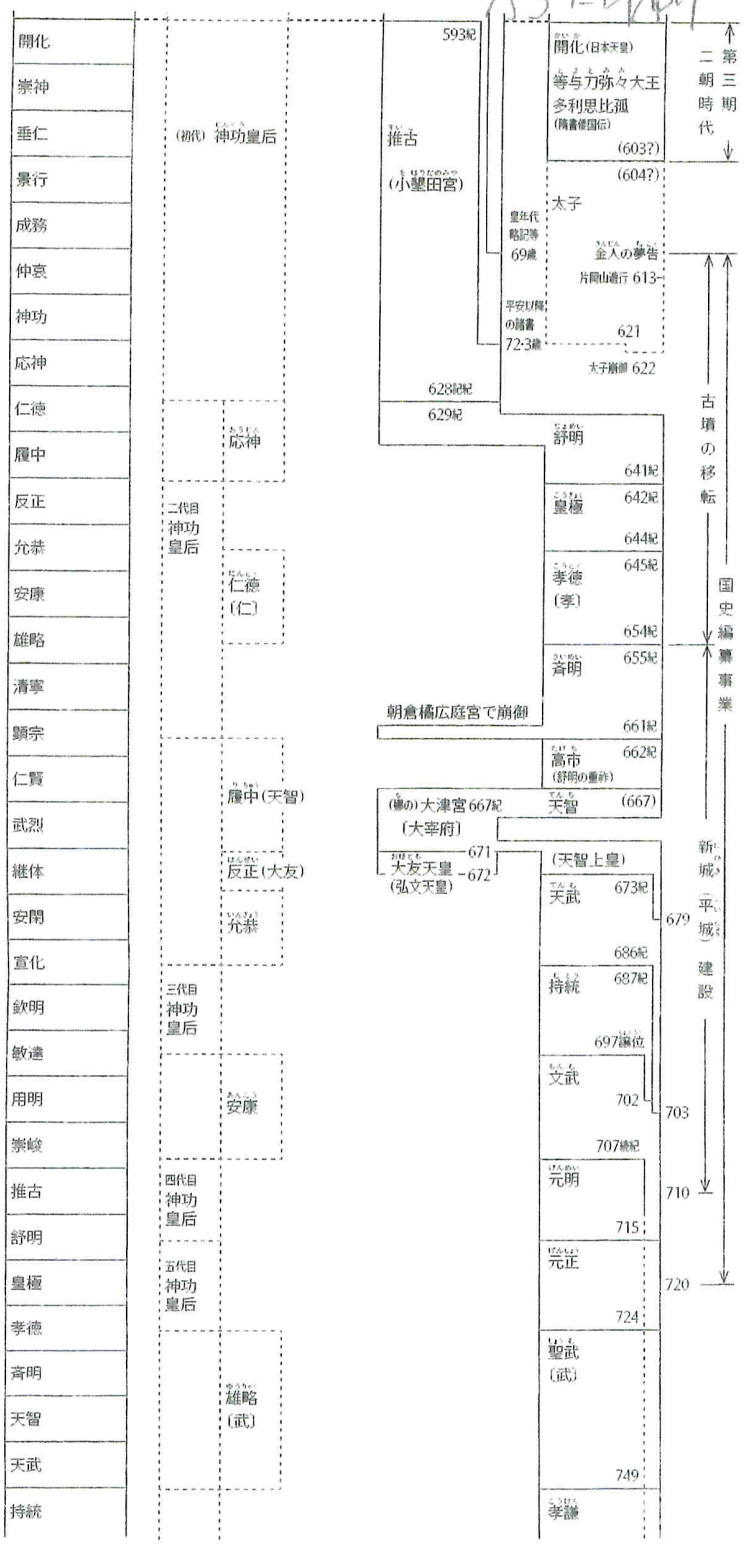
※ 仁徳天皇も履中天皇も、共に、「讃」という名で朝貢したのであろう。

- (433?) 讃（履中）が死んで、弟珍（反正）立つ。
- (?) 倭国王珍（反正）、宋に入朝。（宋書倭国伝）
- 438 倭国王珍（反正）、宋に入朝。（宋書文帝紀）
  （入朝が反正天皇崩御後になったか）
- 443 倭国王済（允恭）、宋に入朝。（宋書倭国伝）
- 451 倭国王済（允恭）、宋に入朝。（宋書文帝紀）
- (?) 済（允恭）死す。世子興（安康）、使いを遣わして貢献。（宋書倭国伝）
- 460 倭国使を遣わして貢献。（宋書孝武帝紀）
- 462 倭王世子興（安康）を安東将軍・倭国王とする。（宋書倭国伝）
- (?) 興（安康）死んで、弟武（雄略）立つ。
  （宋書倭国伝）
- (489記) 雄略天皇紀の遺詔は隋書・高祖紀の文章を点綴したものというが、この両書ともに、「天下を共治すること」を望んでいる。
  （ここに、二朝時代が出現したと考えたい）
- (?) 扶桑略記は「飯豊天皇、廿四代女帝」とし、皇胤紹運録は「飯豊天皇、忍海辺女王是也」といい、両書とも天皇とする。
- 503（癸未の年） 隅田八幡画像鏡を、次のように解したい。
  「日十大王」（飯豊大王）の癸未の年八月、男弟王（太子億計王）が意柴沙加宮（忍坂宮）に在す時……斯麻（百済第25代武寧王、在位501～523年）が開中費直・今州利二人等を遣わして、この鏡を作る」
  ＊男弟王とあるのだから、日十大王は女性（姉）なのだろう、と思われる。
- 526 日本書紀紀年の継体20年（526）は、武烈7年なのであろう。（継体紀20年条参照）
- 527 「磐井の乱」は、二朝の戦いの一端を示しているようである。（継体紀21年8月1日条末尾参照）
- (530?) 神武天皇（継体天皇重祚）、日辺日本国（近畿）の橿原宮で即位か。
- 530 欽明天皇即位。（帝説）
- 531（辛亥の年） 「辛亥の年（531）に『日本』の天皇及び太子・皇子がともに死んだ」という奇怪な記事を日本書紀は載せている。（継体紀25年条）
  「日辺日本（近畿）の武烈天皇及び太子・皇子がともに死んだ」ということを示唆しているのであろう。
- 534 継体天皇（神武天皇）退位か。（継体紀25年条「或本云」）
- 538 欽明朝の戊午年（538）、畿内に仏教伝来か。
- (552?) 継体上皇、崩御か。（82歳紀）
- 552 壬申年（552）、大倭国（九州）に仏教伝来か。
- 562 任那（日本府）、新羅に滅ぼされる。
- (欽明28?)「古の風」として続いてきた『殉死』の禁。
  （垂仁紀28年条参照）
  垂仁28年に始まった殉死は、仏教を敬う欽明天皇によって、禁じられたのであろう。
  但し、殉死は孝徳天皇大化二年迄続く。
- 574 厩戸豊聡耳皇子（聖徳太子）誕生。
  法隆寺釈迦像光背銘文の薨去の年から逆算。
  （「聖徳太子」亀井勝一郎、日本ソノサービスセンター、66頁）
- 587 物部守屋を討伐。
- 592 「朕が嫌しとおもう所の人を断らむ」という崇峻天皇の詔を聞いた蘇我馬子は徒党を集めた。東漢直駒は、東（近畿地方）の孝元天皇を弑せまつったのであろう。

(10枚)

235

A3にEP/6U



- 593　推古天皇元年。厩戸皇子立太子。(紀等)
- 594　等与刀弥々大王（厩戸皇子）即位か。
  元興寺丈六光背銘に「等与刀弥々大王」としるされている。
  隋書倭国伝中の「多利思比孤」のことと思われる。
- 603　12月5日、冠位十二階を制定する。
- 604　1月1日、冠位を始めて賜う。
  (恐らくこの頃、等与刀弥々大王は、自ら王位を返上し、皇太子となられたのであろう)
- 604　4月3日、皇太子、憲法17条を作る。
  「国にふたりの君非ず。民にふたりの主無し」とある。(第十二条)
- (?)　金人の夢告。
- 613　片岡山遊行以後、聖徳太子は国史編纂事業に没頭された、と考えてみたい。
  「天皇は神の直系の子孫である。神の正統な血筋を受けていない者が、天皇に代わって日本を統治することは出来ないのだ」
  という国史が創られ、先祖の墓が九州から近畿へ移され、平城の地に都の建設がすすめられてゆくことになるのであろう、と推察される。
- (?)　先ず、上・中・下の大和三道が作られた。
- 645　蘇我氏（本宗家）滅亡。
- 645　孝徳天皇は、
  「上古の聖王（仁徳天皇）の行なわれた跡にしたがって天下を治めよう」
  と言われた。(紀)
- 645　難波長柄豊碕に遷都。(仁徳天皇も難波に都された)
- 646　大化改新の詔を発布。
- 656　「香山の西より石上山に至る渠をほる。(未だ成らざる時) 時の人は、狂心の渠といった」(紀)
  ＊石上の石や香山の西あたりの石を舟200隻で運んで、平城の湿地を埋め立てたか
- 663　白村江で、唐・新羅連合軍に大敗。
- 664　防人・烽(のろし)を置き、水城を築いた。
- 665　大野城・椽城を築いた。
- 667　(難の) 大津宮に都を遷した。
  (＊天智天皇は、近江国に引き籠ってしまうほど傷病だったわけではあるまい)
  内裏を持つ大宰府は、遠の朝廷と呼ばれた。
- 671　11月24日、(近江宮に相当する) 大宰府炎上か。(紀)
  (＊但し、天武朝に、規模を拡大してあわただしく再建したのであろう)
- 672　壬申乱（じんしんのらん）
  大海人皇子は天をよきる(阿蘇の)黒雲を占い、「最後には天下を得るだろう」と言われた。
  大海人軍は大友天皇・天智上皇分断に成功。
  (＊大友天皇は自殺。天智上皇は吉野に幽閉されたか)
- 679　吉野の会盟。天智上皇の前での盟い。
- 681　天武天皇、帝紀・上古の諸事を記定させる。
- 686　天武天皇退位。吉野で国史編纂事業に没頭。
  (これ以後、持統天皇の吉野行幸の記事が頻出する)
- 694　藤原宮に遷る。
- 697　皇太子（文武天皇）に譲位する。(紀)
- 701　大宝律令の制定。
- 702　持統天皇崩御。
- 703　天武上皇崩御か。
- 707　文武天皇(豊祖父天皇ともいう)が、母元明天皇に譲位されたか。
  (＊譲位後、文武上皇は、豊祖父と呼ばれるほどの長寿を保たれたのだろう)
- 710　平城京への遷都。(邪馬台国の都に相当する壮大な都が現出)
- 712　「古事記」完成。
- 713　諸国に「風土記」の編纂を命ずる。
- 720　「日本書紀」完成。(聖徳太子が理想とされた歴史書完成)
  これ以後、真実の歴史を伝えるものは、ことごとく抹殺。人の口封じも行なわれたことであろう。
  そして、戦国時代を経て江戸時代となったとき、聖徳太子の理想はついに完結した。(真実の日本の歴史を知る者は誰もいなくなっていたのだった)

注記:

- 縦長の用紙に 横書きしている場合、インターネットの画面上では、非常に読みにくいですね。
- 画面上部の『回転マーク』を押し、時計回り方向に９０°ずつ、３度回転させると、通常の横書き文章になります。

・頁に掲載下さい。
・『新・やまと物語』第三巻 第3表から転写して下さい。

第３表　弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者 九州	統治者 中国	統治者 近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
		前300		当初の弥生人渡来		
弥生時代	前期	前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。（「三国志」韓伝） （7～80年）	【箕子達による百余国の時代】		
		前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位（紀）			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国（極南界）		
	後期	100	・57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 ・107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。			
		200	・147 ・188 倭国大乱	倭奴国（極南界）（小銅鐸廃絶）		
		300	・239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 ・248(?) 卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。	【倭人による30余国の時代】	男王素（素戔嗚）を追放。素、母の根国を建国。（近畿に古墳出現） 「母国」（ものくに） 当初の出雲国	
古墳時代		400	（銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合）	（倭人による統一）	（銅鐸廃絶） 出雲国の国譲り〔現在の出雲国へ国替え〕（銅鐸廃絶）	

（イ）、（ロ）の位置を、同じにして下さい。

（破線）赤い点線にとり引くこと！

（ロ）

＊近畿地方の高度な文化は、弥生時代末に突然衰退する。＊その後、高地性集落が急激にふえる。

追加の文字を赤色。字の大きさは、他と同じ。

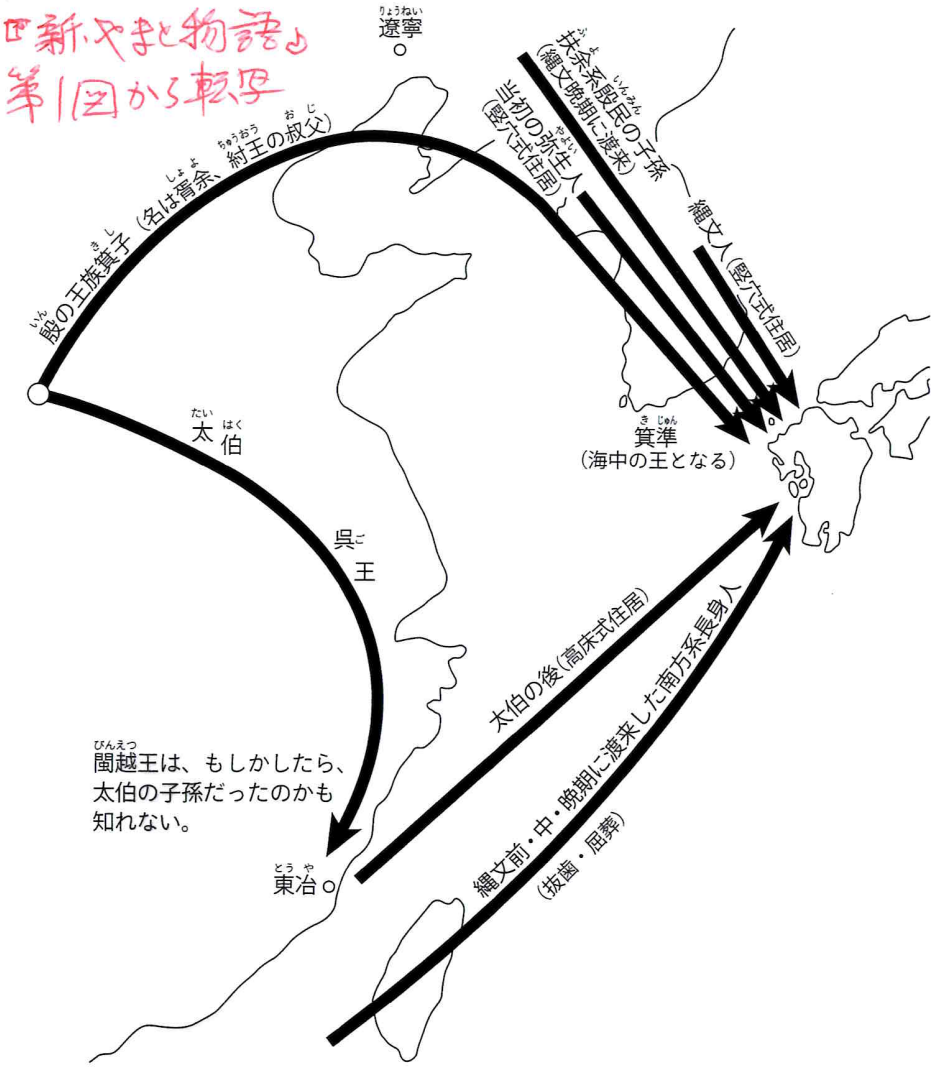
がめかすりたい＊衰退衰退

アミ点が消えないよう注意

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
（「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照）

7

・左頁に掲載下さい。
・『新やまと物語』第1回から転写



第1図　六つばかりの種族（想像図）

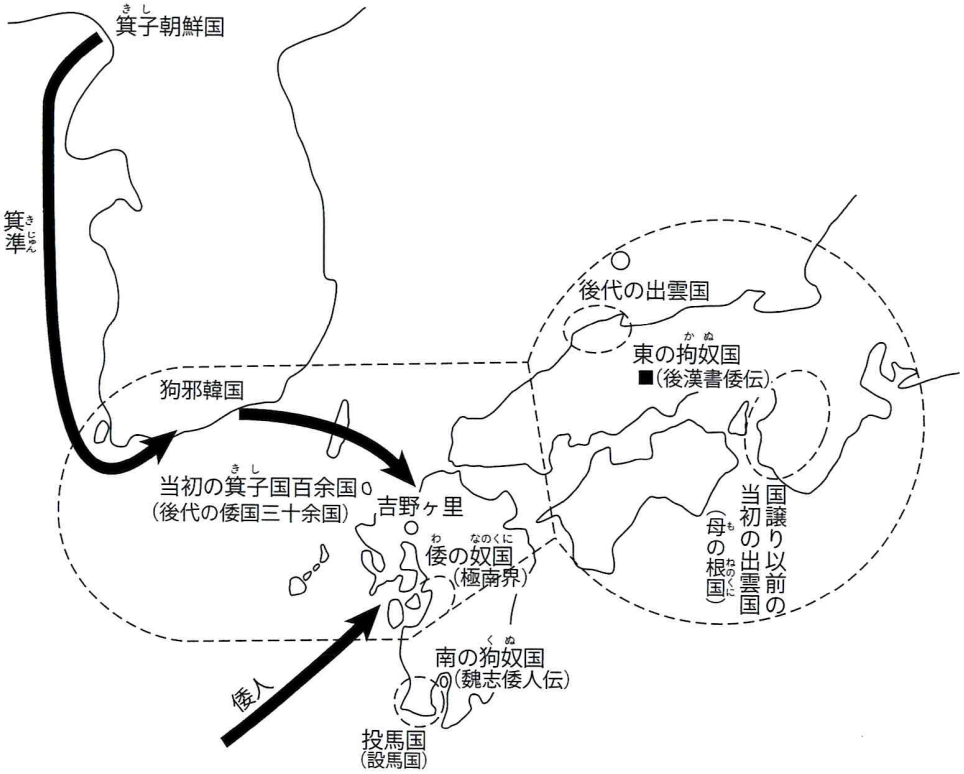
トル

第3表　弥生時代を中心とする時代区分

時代	区分	西暦	出来事	統治者 九州	統治者 中国	統治者 近畿
縄文時代	晩期			縄文人		
弥生時代	前期	前300		当初の弥生人渡来		
		前200	・前190頃、箕子朝鮮国奪われる。箕子は、南韓の王となる。 ・前180頃、箕子は、北九州・山口地方を領有し、「海中の王」となったか。（「三国志」韓伝）	【箕子達による百余国の時代】		
		前100	・前104頃、倭人東遷開始か。 ・前97、崇神天皇即位（紀）			
	中期	B.C. A.D.		倭奴国（極南界）		
	後期	100	・57、極南界の倭の奴国、後漢へ朝貢。 ・107、倭の奴国、再び後漢へ朝貢。			
		200	・147 } 倭国大乱 ・188 } 倭国大乱	（小銅鐸廃絶） 【倭人による30余国の時代】		
		300	・239、卑彌呼、魏国へ朝貢。 ・248（?）卑彌呼死。径百余歩の塚が作られた。		男王素（素戔嗚）を追放。素、母の根国を建国。（近畿に古墳出現）	当初の出雲国「母国」（ものくに）
古墳時代		400	（銅剣・銅矛文化圏が、銅鐸文化圏を併合）		（銅鐸廃絶） （倭人による統一）	出雲国の国譲り〔現在の出雲国へ国替え〕（銅鐸廃絶）

〔注〕当表の『時代』および『区分』は、佐賀県教育長、高島忠平氏の見解を基にしている。
（「吉野ヶ里」安本美典、毎日新聞社、156～7頁参照）

・右頁に掲載
・『新やまと物語』第2図から転写。



第2図　東西二つの文化圏の対立（想像図）

・左頁に配置して下さい。

写真図版10　聖徳太子像

『廣隆寺』広隆寺発行（平成６年の御贈進後に発行）、25頁参照。

・推古天皇11年11月１日、聖徳太子が秦河勝に仏像を授け、一寺を建立せしめられたのが広隆寺の開創であり、その当時の太子の御姿を上宮王院に祀っている。製作年代は、平安時代後期の元永３年（1120）である。
・この太子の尊像には古来、歴代天皇の黄櫨染の御袍の御束帯（御即位の時着御される衣服、又は宮中の儀式の時お召しになる最高の儀服）が、即位後贈進され、各天皇御一代を通じて着用される御例である。
・毎年11月22日に１日だけ御開帳される。
・手前に、履物が揃えられている。

新・やまと物語 第一巻 183頁　10

貴3579-3/215

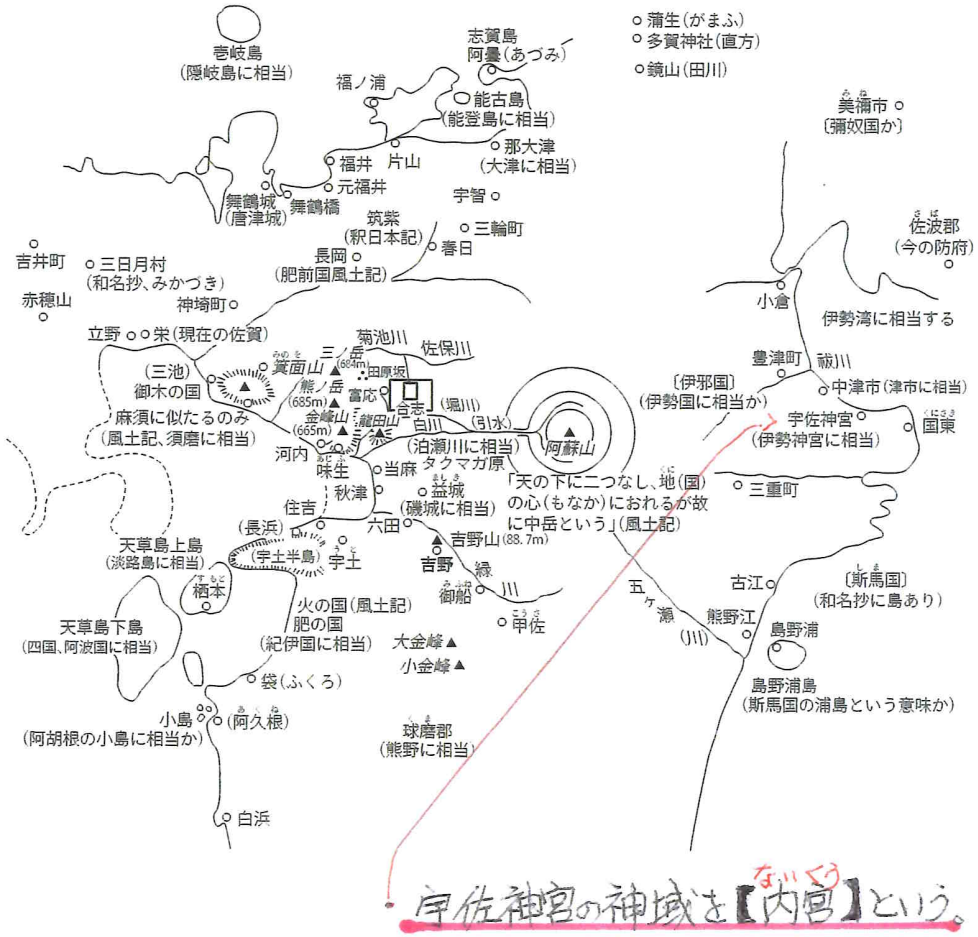
10表 「推古朝」の寺院建立等一覧

西暦（年）	元号（年月日）	経緯
	推古天皇	
593	元年4月10日	・厩戸皇子立太子（20歳）。（紀等） ＊是歳「四天王寺」を玉造に造り始めたか。（紀・補闕記等参照）
594	2年2月1日	・等与刀弥々大王、小国日辺日本国の王『粟散王』として即位か。（紀・伝暦・他参照）
596	4年10月 —	・上宮聖徳皇、伊予の湯に幸行す。（風土記）〔九州へ向かう途中、伊予に立ち寄られたのであろう〕
	11月 —	・九州（肥後国）に「法興寺」完成か。（紀参照）
598	6年4月15日	・上宮王、勝鬘経を講き、播磨国の田300余町を「法隆寺」の地と為す。（法王帝説） 〔用明上皇の為、九州（肥後国）に「法隆寺」の建立が企図されたか〕
600	8年 ———	・倭王、隋に使者を遣わす。（隋書倭国伝）
601	9年2月 —	・大和国に「斑鳩宮」の造営が企図される。（紀参照）
603	11年2月 —	・大将軍（西の国の皇太子押坂彦人皇子）と 将軍来目皇子、薨去か。（紀）
	10月4日	・都を豊浦宮から小墾田宮に遷す。〔推古天皇の都は九州（肥後国）にあったのだろう〕
	11月 —	・大楯および靫を作り、また旗幟に忝がく。〔即位のときなどに、大楯をたてることが、後の例である〕（紀）
	12月5日	・冠位12階を制定する。（紀） 〔冠位12階は、東西二朝の朝臣達を一系列下に置く為に定められた、と考えてみたい〕
604	12年1月1日	・冠位を始めて賜う。（紀） ＊恐らくこの頃、等与刀弥々大王は、儲后（皇太子）となられたのであろう。（補闕記等）
	4月3日	・皇太子、憲法17条を作る。（紀） 〔一朝の世となった当初に、「朝臣達の心得」として作られたのではなかろうか〕
605	13年4月1日	・鞍作鳥を、「元興寺」の丈六の仏を造る工とする。（紀） 〔大和国に「元興寺」建立が企図されたのであろう〕
	10月 —	・皇太子、大和国の「斑鳩宮」に遷る。（紀・伝暦） ＊用明上皇が、「子、遠く斑鳩に別る。朕の快からざる所なり」と仰せられたのだろう。
606	14年4月8日	・花祭（誕生会）の是の日、九州の「法隆寺」の為の銅の仏像（薬師如来像）と、大和国の「元興寺」の為の繍の丈六の仏像とを、並びに造り終わったか。（紀参照）
	7月 —	・是歳（7月以前に）推古天皇から賜った播磨国の水田100町は、大和国の「斑鳩寺」に納められたのであろう。（紀） 〔当初の「斑鳩寺」（若草伽藍）の造営が企図されたと解したい〕
607	15年 ———	・『法隆寺』のもともとの本尊であったという薬師如来像の開眼式が行なわれ、仕え奉ったのであろう。（薬師如来像光背銘参照） 〔この頃、九州（肥後国）に「法隆寺」が完成したと想像される〕
608	16年8月3日	・隋の客「裴世清」等京に入る。（紀）
609	17年4月8日	・（花祭の）是の日、大和国の「元興寺」の金堂内に、鞍作鳥が丈六の仏像を入れたのであろう。（飛鳥大仏銘文・紀参照）
610	18年4月30日	・夜半に、大和国の「斑鳩寺」（若草伽藍）炎上。（補闕記参照） ＊この時、もともとの釈迦三尊像が火中し、小片に砕けたのであろう。
622	30年1月22日	・聖徳太子発病。 ＊釈迦三尊像発願。焼けた釈迦三尊像を基にして、再造することになったのであろう。
	2月22日	・聖徳太子薨去。（49歳）
623	31年3月半ば	・釈迦三尊像、発願からわずか13ヶ月あまりで完成。（釈迦三尊像光背銘参照） 〔この頃、「斑鳩寺」（現存する大和国の法隆寺）が再建された、と推察される〕
628	36年3月7日	・推古天皇、崩御（75歳）。
	天智天皇	
669	8年 冬	・大和国の「斑鳩寺」に火災。〔講堂・回廊北半部が焼失し、この時、釈迦三尊像の大光背が損傷したと思われる。また、五重塔4階に飛火したものの、消火されたのではなかろうか〕
670	9年4月30日	・夜半之後に「法隆寺」炎上。（紀）〔推古18年（610）の干支1巡後、つまり天智9年（670）の4月30日夜半之後に九州の「法隆寺」が荼毘に付されたのであろう〕

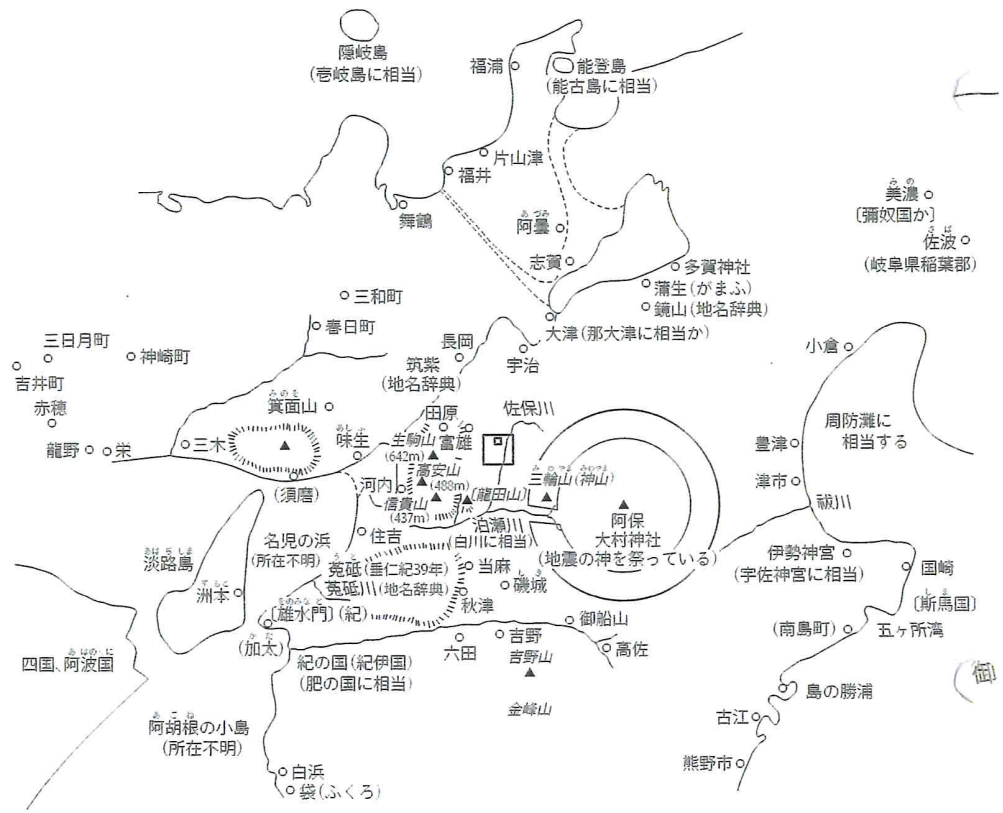
＊「現法隆寺は、推古朝の創建以来、一度の火災にも遭遇していない」と寺伝はいう。（「聖徳太子」上原和、講談社、20頁。他参照）

（第10表）11

236

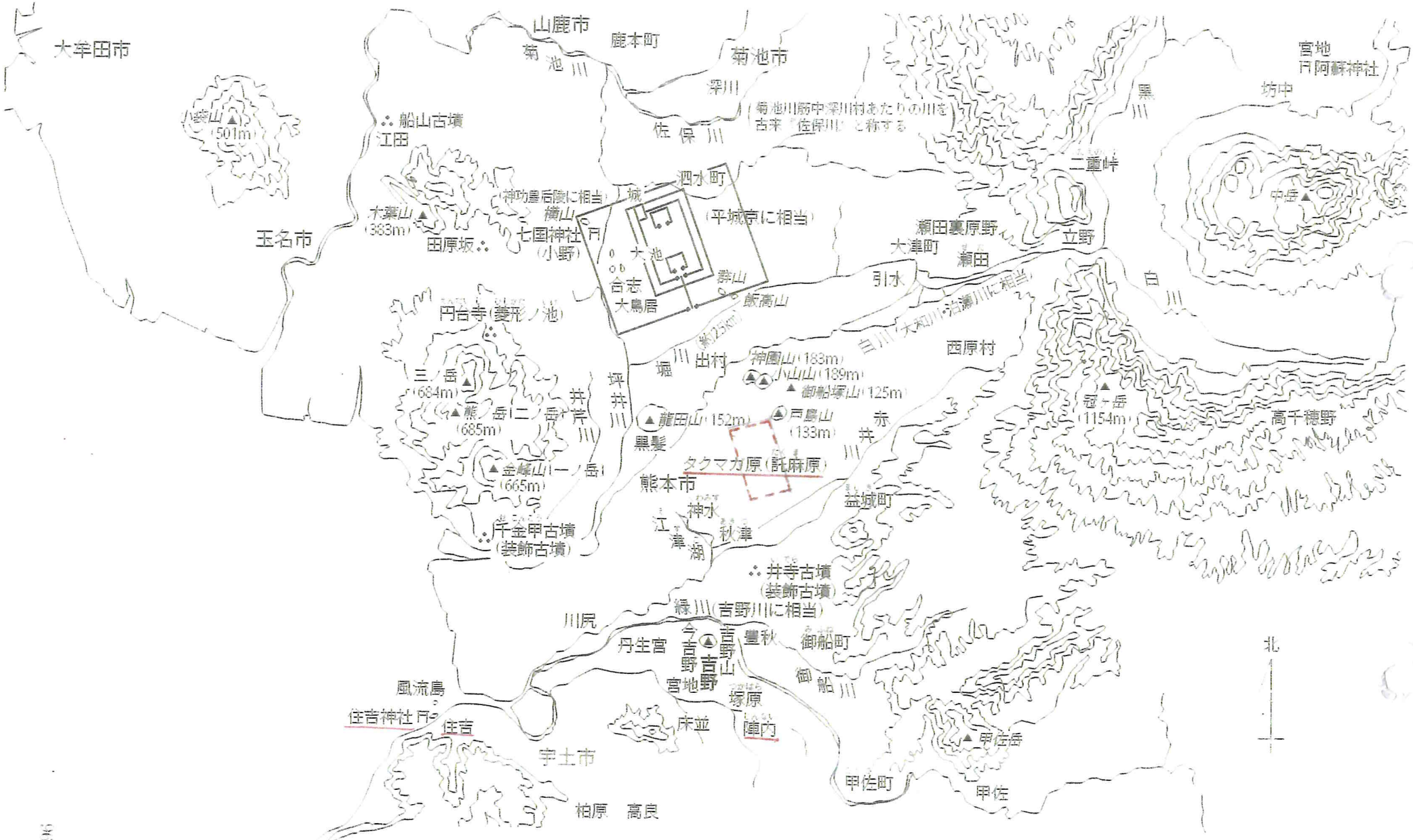


第19図　肥後国を中心とする九州の地図



第18図　大和国を中心とする近畿の地図

12



第12図　曹魏の洛陽城を模した「邪馬台国の都」想像図

〔注〕「白川中流域一帯に前方後円墳が無い」ということが注目される。

第13図　邪馬台国の「洛陽城」想像図

〔注〕①曹魏代の宮城（九六城）の城壁には、「十二の宮城門」が設けられていた。また、曹魏の明帝は、後漢代の崇徳殿の故処に「太極殿」を建てた、という。

②一方、『日本書紀』皇極天皇四年六月条には、「大極殿」や「十二の通門」の記載がある。

③合志原の『大池』『小池』について、「聖徳太子当国に《五ヶ所の池》を穿ち給ひしーなりといふ」と言い伝えられている。（「菊池郡誌」熊本県教育会菊池郡支会、名著出版、昭和48年1月発行、377頁〈大池小池〉参照）

※昭和42年6月30日付、国土地理院発行の5万分之1地図「高瀬」「隈府」参照。

14 P-1/2

・右頁全面に限度一杯ぱっと　出して掲載下さい。
・『新やまと物語』第一巻　156頁からコピーして下さい。(*チェック)　するのが大変だから、新しく作成なり
(第9表と同一)　「新や」(1)—156頁　で下さい。

第41表　内宮（天照大神の宮）・外宮（豊受大神の宮）・外宮（天照大神の離宮）・八幡宮の変遷の歴史（想像）

300
400
500
600
700
800

天照大神

八咫鏡を殿の内に祭った。〔神代紀（下）第9段1書第2参照〕
〔天忍穂耳尊に相当する応神天皇の御代の末頃（4世紀末）か〕

八咫鏡

笠縫邑に祭った。（崇神紀）
〔崇神天皇に相当する後期継体天皇の時か〕

北伊勢の神宮へ遷座。〔倭姫命世記〕
・欽明25年（564）頃のことと思われる。
・垂仁紀25年3月条参照。

〔周行天下〕

南伊勢の滝原神宮（多気大神宮）へ遷座。〔倭姫命世記〕
・欽明26年（565）頃のことと思われる。
・垂仁紀25年3月条の一書の所伝〈翌丁巳年10月条〉参照。

外宮（とつみや・離宮）

多気大神宮を度会郡へ遷す。
文武2年（698）12月29日（続日本紀）

現在の内宮へ遷座。〔710頃か〕

八咫鏡を外宮から内宮へ移したか。

内宮（ないくう）
〔祭神は天照大神〕

外宮（げくう）
〔祭神は豊受大神〕

＊板垣内東北隅の『御饌殿』において、天照大神を祭祀している。

（雄略天皇に相当する）聖武天皇の神亀元年（724）7月7日か。

豊受大神

雄略22年（478）7月7日に、豊受大神を迎え奉った。（太神宮諸雑事記）

〔周行天下〕

馬城峯（大元山・御許山）山頂に遷座。
・欽明23年（562）頃か。
・欽明紀23年6月条参照。

外宮（げくう）

亀山へ遷座。
文武2年（698）12月29日の直前のことと思われる。

内宮（ないくう）

八幡神

欽明32年（571）2月
八幡神
肥後国菱形ノ池に出現。（神皇正統記）

神亀2年（725）～4年（727）、馬城峯山頂へ遷座か。
朝廷は勅使を派遣し、造営と遷座に当たった。
・「宇佐神宮」宇佐神宮庁、2～3頁。
・「豊前国風土記逸文」。

大尾山へ遷座。神護景雲年間（767～769）
（「宇佐神宮由緒記」48頁）

亀山へ遷座。
延暦元年（782）
（「宇佐神宮由緒記」48頁）

10

新・やまと物語　第[illegible]巻

15

目次

①『新・やまと物語』の題目

（出版済み）

第1巻

まえがき
序　論
この物語の主張
系譜
荒筋
『日本書紀』の記載におけるかくれた約束事

第2巻

新・やまと物語

第一編　神代〔先史時代～応神朝〕
第　一　章　天地開闢
第　二　章　激動の黎明期
第　三　章　極東地域にみられる各種文化についての考察
第　四　章　北九州・中国・近畿地方の遺跡が語る激変の時代
第　五　章　東西二つの文化圏の対立（当初の弥生人と箕子の対立）

（以下、インターネット）

第3巻

第　六　章　太伯の後
第　七　章　倭国創建（会稽の東冶から東遷。箕子国内の極南界に倭奴国を建国）
第　八　章　垂仁天皇（五七年、極南界の倭奴国、後漢へ朝貢）
第　九　章　景行天皇（一〇七年、倭奴国、後漢へ朝貢）
第　十　章　成務天皇（倭国大乱。倭国、北九州・山口地方に三十余国を置く）

第4巻

第十一章　仲哀天皇
第十二章　神功皇后（息長足姫尊）
第十三章　三国鼎立
第十四章　洛陽の変遷の歴史
第十五章　衛氏朝鮮以後の朝鮮半島の歴史
第十六章　景初三年春
第十七章　魏国への旅立ち
第十八章　洛陽の都
第十九章　帰途
第二十章　単位
第二十一章　倭国北辺の国々
第二十二章　新王城

第5巻

第二十三章　住吉の客人
第二十四章　倭王に拝假す
第二十五章　帰国を延しての倭国での日々
第二十六章　冬至の祭〔新嘗祭〕
第二十七章　倭国の文化
第二十八章　邪馬台国に現出した洛陽城
第二十九章　龍神の聟
第　三十　章　相剋
第三十一章　玉匣

第6巻

第三十二章　東海の島の奇妙な習俗
第三十三章　梯儁の安否をたずねて
第三十四章　日御子の哀しみ・そして死（径百余歩の塚の内へお隠れになる）
第三十五章　悪阻の儀式（殉葬する者、奴婢百余人）
第三十六章　千餘人もの戦死者を出した内乱
第三十七章　天石窟の儀式（年齢と地位と名前を受け継いで出生する襲名の儀式）
第三十八章　女王認知の儀式〔大嘗祭〕
第三十九章　素戔嗚の偉業
第　四十　章　倭国の女王田心姫
第四十一章　応神天皇（上）

第7巻

第四十二章　朝鮮半島の歴史
第四十三章　応神天皇（中）
第四十四章　東の拘奴国壊滅（中国地方平定）
第四十五章　母国『出雲国』の国譲り（近畿地方を譲り受ける）
第四十六章　応神天皇（下）

第8巻

第二編　繰り返される二朝の慣例〔仁徳朝～崇峻朝〕
第四十七章　第二期共立時代（大雀命・宇遅能和紀郎子）
第四十八章　仁徳天皇
第四十九章　謎の世紀『五世紀』
第　五十　章　装飾古墳
第五十一章　近畿地方の古墳
第五十二章　埴輪
第五十三章　隠された二朝時代の概要（第一期二朝時代・第二期二朝時代の経緯のあらまし）
第五十四章　乎富等大公王（後の継体天皇）の出自について
第五十五章　雄略天皇（「共治国家」「共治天下」を望む遺詔）

（第10巻）17

第9巻

第五十六章　〔天上国九州の天皇〕継体天皇
第五十七章　〔日辺日本国の天皇〕清寧天皇（白髪武廣國押稚日本根子天皇）
第五十八章　飯豊天皇
第五十九章　顕宗天皇〔弘計天皇（弟）〕
第　六十　章　仁賢天皇〔億計天皇（兄）〕
第六十一章　武烈天皇（仁徳系の王統最後の天皇）
第六十二章　時代の圧縮
第六十三章　第一期二朝時代の終焉
第六十四章　第二期二朝時代の幕開け
第六十五章　欽明天皇（天國排開廣庭天皇）
第六十六章　敏達天皇
第六十七章　用明天皇
第六十八章　崇峻天皇（朕が嫌しとおもふ所の人を断らむ）

第10巻

第七十一章　阿蘇山
第七十二章　隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わしむ
第七十三章　国に二の君非ず
第七十四章　皇太子廐戸豊聰耳皇子
第七十五章　金人の夢告
第七十六章　太子の苦悩
第七十七章　聖徳太子の薨去
第七十八章　蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
第七十九章　舒明天皇
第　八十　章　皇極天皇

第11巻

第八十一章　孝徳天皇
第八十二章　斉明天皇
第八十三章　高市天皇（舒明天皇の重祚）
第八十四章　天智天皇

第12巻

第八十五章　壬申乱
第八十六章　宗像神社
第八十七章　天武天皇（上）
第八十八章　新城（平城宮）
第八十九章　天武天皇（下）
第　九十　章　持統天皇

第13巻

第九十一章　文武天皇
第九十二章　元明天皇
第九十三章　奈良時代
第九十四章　平安時代（上）
第九十五章　小野小町
第九十六章　平安時代（下）
第九十七章　南北朝時代（二朝時代）
第九十八章　戦国時代
第九十九章　近世（安土・桃山・江戸時代）
第　百　章　現代及び未来
あとがき

第三編　日本の歴史改編、そしてその後〔推古朝～現代〕

第六十九章　第三期二朝時代（天上国の推古天皇・日辺日本国の等与刀弥々大王）
第　七十　章　推古朝の寺院・仏像

②『新・やまと物語』第[illegible]巻の目録

新・やまと物語

第三編　日本の歴史改編、そしてその後〔推古朝～現代〕

第六十九章　第三期二朝時代（天上国の推古天皇・日辺日本国の等与刀弥々大王）
第　七十　章　推古朝の寺院・仏像
第七十一章　阿蘇山
第七十二章　隋の文帝、所司をして倭国の風俗を訪わしむ
第七十三章　国に二の君非ず
第七十四章　皇太子廐戸豊聰耳皇子
第七十五章　金人の夢告
第七十六章　太子の苦悩
第七十七章　聖徳太子の薨去
第七十八章　蘇我馬子の死、そして推古天皇の崩御
追加資料
『皇室系譜』……
『保科表』……
『干支表』……
『図・表・写真図版索引』……